

復興曲線を用いた長期的復興に関する研究
Study on long-term recovery processes with “revitalization curve”

○宮本匠

○Takumi MIYAMOTO

The present study attempts to visualize the survivors' long-term processes of recovery and revitalization in the affected area of the 1995 Kobe Earthquake, the 2004 Niigata Chuetsu Earthquake and the 2011 East Japan Earthquake. Survivors were interviewed and asked to draw their life courses from the day of the earthquake as curves on the graph with their characteristic dips peaks and plateaus. Obtained curves indicated a variety of revitalization processes depend on the individuals and socio-cultural contexts and provided us with clues to support survivors.

1. 研究の背景と目的

これまでの災害復興や防災を扱った研究の中では、脱文脈化された「生命」を重視し、被災者の個別性にはあまり関心が向けられてこなかった。しかし、例えば東日本大震災からの復興について、室崎(2011)が、人々のくらしが「防災」という一面だけで切り取ることが出来ないものであることを指摘した上で、被災者の視点に立った復興構想の必要性を論じていることを鑑みれば、災害復興や防災の実践の中で、被災者の個別性に接近することは急務の課題である。そこで本研究では、災害復興について、独自のインタビュー手法である「復興曲線」インタビューを紹介し、被災者の個別性について考察する。

2. 復興曲線

「復興曲線」インタビューとは、図1のように、被災者に x-y 座標の描かれたシートを提示し、横軸を地震から今までの時間、縦軸を被災者の心理や地域の雰囲気の様子と位置づけ、その変化を表す曲線を描いてもらいながら進めるインタビュー手法である(Miyamoto & Atsumi, 2011)。図1は新潟県中越地震の被災地である長岡市荒谷集落の男性Kさんが2008年2月に描いた曲線である。「復興曲線」インタビューでは、復興について語ることが被災者に委ねるのだから、研究者が予め何らかの仮説や概念枠組みを用いて質問項目や指標を設定したりするのではなく、語り手自身は何について語るのかを選択する主役となるような形でインタビューを行うことが重要視される。だから、語り手が「縦軸は地域の変化っていても、それは経済ってこと？それとも、地域おこしの活動ってこと？」とたずねられたら、「じゃあ、地域の経済と、地域おこしと、自分の生活で3枚描いてみましょうか」というように、その場その場で語り手とともにカスタマイズする。インタビューの前に、あらためて語り手の前に広がる復興がどのようにあるのか、ともに探ることで、こうしてひとりひとりの復興が語られることになる。

筆者はこれまで、1995年の阪神・淡路大震災や2004年の新潟県中越地震の被災者に「復興曲線」インタビューを行ってきた。2012年は、東日本大震災の被災地で実施する予定である。学会当日は、それらの「復興曲線」を提示し、被災者や災害復興の多様性について議論を行う

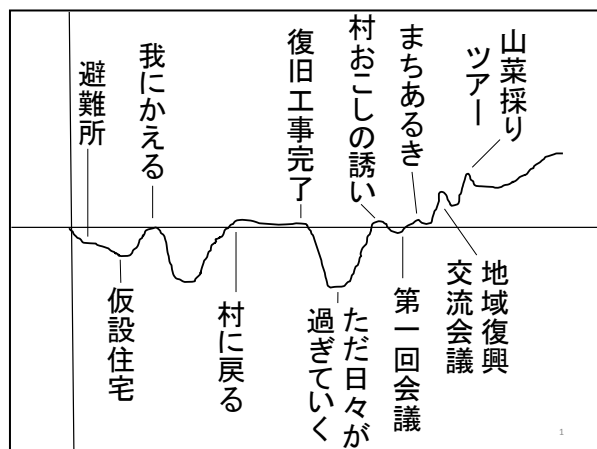


図1 長岡市荒谷集落Kさんが描いた曲線